

病は氣から（モリエール）

パリに住む財産家のアルゴンは、身體は健康そのものなのに自分で勝手に重病を患つてゐると思込み、毎日藥をどつさり飲んで貪欲で無能な醫者達の食ひ物にされてゐる。しかも、醫者を婿にすれば何かと安心だらうからとて、戀人のゐる長女を若い阿呆な醫者と無理矢理結婚させようとして悶著を惹起す。一方、アルゴンの若い後妻は、口では夫を愛してゐると云ひながら、肚の底では夫の死を冀こひねがひ、あまつさへ、アルゴンの前妻の娘達を尼寺に押込んで財産を獨ひとりじ占めにしようと思ふ。そんな後妻の魂膽こんたんについて、アルゴンは弟のベラルドや女中のトワネットから散々警告されるのだが、てんで聞く耳を持たうとしない。

詰りアルゴンは「お醫者病」を患ひ藥漬けになつてゐるばかりか、後妻の「張りめぐらしたわな」に「まんまと引つかかつて」ゐる何とも愚かでお人好しな男なのだが、彼を覺醒させるべくベラルドとトワネットが奇策を用ゐて、まづは主治醫を追拂ふのに成功すると、今度はア

ルゴンに死んだ振りをさせて妻の本心を確かめさせる。夫が死んだと思つて喜んだ妻が思はず本心を暴露すると、さすがのアルゴンも現實に目覺めて己が愚昧を反省する。

だが、それでも彼の「お醫者病」は治らない。アルゴンは再び死んだ振りをして、長女の自分に對する純粹な愛情を確かめると、長女が戀人と結婚するのをやつと許す氣になるが、但し、戀人が醫者になつてくれたら、といふ條件をつけるのだ。すると、どうしても醫者無しではゐられないといふのなら、自分が醫者になれば一番安心だらうとベラルドに云はれ、愚かしくもアルゴンがその氣になつた處で、この喜劇は幕となるのだが、これを要するに、アルゴンは最後の最後迄「お醫者病」を克服する事が出来ないのである。

作者モリエールの醫者嫌ひは有名だが、この作品に出る醫者達も、「盲目的に古人の學說を遵守^{じゅんしゆ}」するばかりで、「子供だましのハツタリ」でしかない古典の知識は溜込んでゐても、人體なる「神祕」の本質の究明にはとんと無關心だから、肝腎の病氣の治療については全く無知だし、「病人を助きたい一心」などと口先では云ふが、實は患者から金を^む取り取る事しか念頭に無い。それなのに、そんな醫者や醫學を有難がる手合が世間に多いのは、畢竟^{ひつじやう}、人間が「弱い」からだとベラルドは云ふ。いつの世にも「人間のなかには美しい妄想がもぐりこんで來

て、それに浸つてゐれば「悪い氣がしない」ものだから、「ついそれが眞實だと思ひ込みたくなる」のであり、醫者や醫學に頼りたがるのも、詰りはその種の「妄想」でしかないといふのである。

モリエールはこの作品の執筆中、惡質の胸部疾患に苦しみ、初演の公演中に急死して了ふ。愚かしきアルゴンは、死の切迫を知つたモリエールが「己が弱さをパロディ化した姿」だとの云ひ傳へがあるといふ。事實とすれば見事な作家魂と云ふ他はない。ベラルドやトワネットは理性の聲を代辯するが、如何に理性の聲に従はうと努めても、感情がそれを許さず、「美しい妄想」に縋り附きたがるのも人間である。モリエールは内なるアルゴンをとことん笑ひのめす事によつて、己れの自我の眞實を剔抉しようとしたのかもしれない。

とまれ、モリエールの昔も今も、人間は誰しも「悪い氣」がするのは大嫌ひだし、さういふ弱點につけ込むペテン師はいつの世にもなくなるならない。そしてそれは洋の東西を問はないが、「美しい妄想」に惑溺せずして眞實を飽迄も直視せんとする精神の強靱は、「眞實を追ふ狩人」たるソクラテス以來の西洋ならではの傳統であり、それなくしては近代科學もあり得なかつた。

(鈴木力衛譯、岩波文庫)